

日伯新聞

サンパウロ市
電話二一六一八三
郵局三七五
本紙定期費年參拾ミル

針に出るであらうと

伊國皇帝御遺難

去十二日ミロン市ジヨリオセ

ザール廣場の商品見本市開場式

に伊國皇帝ダキクトル・マノエ

ンテ、それもサヤカな商賣を

を持つてゐるだけで他に格別非難

い、但し難看では困る

すべき點なく、在留邦人の氣受

も概してよかつた、大工左官の

赤松夫人の隠れた功を一言し

ては歸朝の途に上る、餞別代りと

は些か妙なものであるが吾

人は茲に功課状を添へて之れを

送り度

從來在外帝國公館の長官から

出す下僚の功課状などものは、

陸海軍のそれとは性質を異にし

單に形式一片、お座なりにポン

とかマイドボンとか記するに止

り、毫も功課状の實を上げてな

い、だから如何にダーラの役

人でも創だらけの書記官でも功

課状の表はいつも綺麗である、

赤松總領事の在伯二ヶ年半の

治績は大体に於て良い方だつた

仕事もよくした、豫算もよく取

つた、此點では歴代領事中一番

である、其代り大分餘計なこ

もした、打棄つておけば簡単に

仕事もよくした、豫算もよく取

つた、此點では歴代領事中一番

である、其代り大分餘計なこ

産業組合を

こうしてつくる

杉山英雄

(五)

十一 其他の記載事項

前記の事項は定款にそれを規定していないと無効になるが、其他に次の事項をも記載する必要がある。然し之は規定してなかつたからと云つて無効とはされない。

一、組合員の負ふ責任

二、組合の存續期限、之は三十ヶ年以上とすることは出来ない

三、利益の配當、損失の分擔

普通の株式會社では、存續期限は何十年とでも隨意に定める事が出来る。若し何等之に就て規定がなければ無定期のものと看做される、然し産業組合では三十ヶ年以上の存續期限を定めることは許されない。もつとも存續期限満了の場合に、總會決議に依つて更に之を延長する事が出來、その旨を定款に規定して置く事は出来る。

一、存續年限は十ヶ年

二、利益分配は毎年行はれ、利益金の一割を積立金として差引き、残半額は各組合員に等分に分配する事

三、各組合員は持株數の如何に拘らず一票の投票権を有し、委任状に依つても一人以上組合員を代理する事

四、組合員は總て連帶責任者であると見做される

十二 供託

さて定款が出来上つたら、それへ組合員全部が署名し、第一其研究心、努力に於てエウクリー・デス・クーニャと比肩され得る人である。特にドン・ジョア回

の十分の力を、本部所在地のラジル銀行又は其他の銀行、若し銀行の無い地方なら聯邦稅務署或は税關へ供託しなければならない、そして組合設立後役員不成立の場合は預入をした發起人等へ拂戻す旨の、特別の供託

金預入證書を貰はなければならぬ。此供託金を必要とする所から、引受株の第一回拂込は、金額の十分の一たるを得ない事が推定される。

若し資本金の一部を、物、不動產又は權利を以て出資する時は、金錢を以てする出資額だけの十分の一を供託するのである。

又定款の最少限の資本金が一百コントスである時、創立の時受取申込總株數の額面額が百五十コントスに上つたとすると、供託金額は實際の資本額即ち百五十コントスの十分の一でなければならない。

尚此の供託は發起人の名義で行するのである。

▼正誤▲ 前回十の十二行目

「總員」とあるは「役員」二十

行目「清算に」は「清算の時」に付訂止

「における積立金の使途」の誤

の誤

過般の總選舉に際しては政府及び與黨が必死の努力をなしたに拘らず其政策は與黨側の失敗に歸したので田中首相始め衆出身閣僚與黨幹部は寄り合ひ協議し失敗の原因を考究したところ其原因是政友會の政綱政策第一般國民に歓迎されず却つ在野黨及び無產政黨の政綱は國民に歡迎された傾向があるので特別議會終了後慎重協議の上其政綱政策に修正を加える等

政友會中立議員の抱き込みに失敗せる爲め一頭十萬圓にて買收したと傳へられてゐる

新代議士の年齢
最高七十四
今回選出された新代議士を年齢別にすれば最年長は岡山縣の犬養毅(七四)次ぎは東京の高木正年(七三)最年少者は東京の坂本一角、京都の水谷辰三郎、福岡の淺原健三氏等で何れも三十二才而して全体に就いて見れば三十才以上

四十才以上
五十才以上
六十才以上
七十才以上

東京市における選舉費用調査
東京區裁判所並に警視廳當局の調査した所によれば今次の總選舉に於て都下より出馬した八十名の候補者中選舉費用の最高額は第六區の民政派鶴岡和文氏の一万五千六百七十圓二十五錢で選舉費用一万七千七百餘圓に可成り接近してゐる日本一最高點をかち得た高木正年氏は一万二千四百九十一圓九十錢、無產税は費ひたいにも費用がないの

文部省の新入學制度が實施されても試験地獄は一向に緩和され

總選舉の失敗に鑑み

我黨内閣政策改正

で費用精算には極めてのん氣に構へてゐる

五年間工事繰延べ

東西五大電力會社は過般の共同調査會に於て各社が今後その有

する事業計畫を遂行すれば昭和七年度末に於ては約五十五万キロの電力過剰となり之を金額に

見積つて一キロの建設費八百圓として總計四億四千万圓の資金を固定することとなるのでこれ

で協議した結果建設費の採算的に不利なるもの需要を將來に待つもの等を今後五年間繰延べる

に於ては自らの尿をとて検査させ前日飲食

のもの

金澤醫大では學生に一週二回各

立學校の助成、中學二部教授の

意見が讀者間にやうやく高く私

かせねばいたいな兒童の権み

は絶ゆる時がないであらうとの

実施、夜間中學の認定等の急務

が各方面に叫ばれてゐるが文部

省に於ても此社會的の要求に鑑

み目下中等教育調査會をして研

究せしめてゐるが大体の肚は夜

計を作つてゐる

のもの

▲尿を檢べて

信州飯田高等女學校で卒業生に

「何んな夫を望むか」との問題

を出したなら八割までが「近代的

なフレッシュな感情の持主で近

事に決定したが具体案に就ては

相當モerner見込

▲理想の夫とは

近衛師團長津野一輔中將病歿の爲め左の通り親補された

第十師團長中將長谷川直敏

任第六師團長

陸軍中將 二子石官太郎

任第十二師團長

陸軍中將 本庄 繁

任第十師團長

陸軍中將 金山 久松

近衛師團長親補

近衛師團長津野一輔中將病歿の爲め左の通り親補された

第十師團長中將長谷川直敏

任第六師團長

陸軍中將 二子石官太郎

任第十二師團長

陸軍中將 本庄 繁

任第十師團長

陸軍中將 金山 久松

近衛師團長親補

近衛師團長津野一輔中將病歿の爲め左の通り親補された

第十師團長中將長谷川直敏

任第六師團長

陸軍中將 二子石官太郎

任第十二師團長

陸軍中將 本庄 繁

任第十師團長

陸軍中將 金山 久松

近衛師團長親補

近衛師團長津野一輔中將病歿の爲め左の通り親補された

第十師團長中將長谷川直敏

任第六師團長

陸軍中將 二子石官太郎

任第十二師團長

陸軍中將 本庄 繁

任第十師團長

陸軍中將 金山 久松

近衛師團長親補

近衛師團長津野一輔中將病歿の爲め左の通り親補された

第十師團長中將長谷川直敏

任第六師團長

陸軍中將 二子石官太郎

任第十二師團長

陸軍中將 本庄 繁

任第十師團長

陸軍中將 金山 久松

近衛師團長親補

近衛師團長津野一輔中將病歿の爲め左の通り親補された

第十師團長中將長谷川直敏

任第六師團長

陸軍中將 二子石官太郎

任第十二師團長

陸軍中將 本庄 繁

任第十師團長

陸軍中將 金山 久松

近衛師團長親補

近衛師團長津野一輔中將病歿の爲め左の通り親補された

第十師團長中將長谷川直敏

任第六師團長

陸軍中將 二子石官太郎

任第十二師團長

陸軍中將 本庄 繁

任第十師團長

陸軍中將 金山 久松

近衛師團長親補

近衛師團長津野一輔中將病歿の爲め左の通り親補された

第十師團長中將長谷川直敏

任第六師團長

陸軍中將 二子石官太郎

任第十二師團長

陸軍中將 本庄 繁

任第十師團長

陸軍中將 金山 久松

近衛師團長親補

近衛師團長津野一輔中將病歿の爲め左の通り親補された

第十師團長中將長谷川直敏

任第六師團長

陸軍中將 二子石官太郎

任第十二師團長

陸軍中將 本庄 繁

任第十師團長

陸軍中將 金山 久松

近衛師團長親補

近衛師團長津野一輔中將病歿の爲め左の通り親補された

第十師團長中將長谷川直敏

任第六師團長

陸軍中將 二子石官太郎

任第十二師團長

陸軍中將 本庄 繁

任第十師團長

陸軍中將 金山 久松

近衛師團長親補

近衛師團長津野一輔中將病歿の爲め左の通り親補された

第十師團長中將長谷川直敏

任第六師團長

陸軍中將 二子石官太郎

任第十二師團長

陸軍中將 本庄 繁

任第十師團長

陸軍中將 金山 久松

近衛師團長親補

近衛師團長津野一輔中將病歿の爲め左の通り親補された

第十師團長中將長谷川直敏

任第六師團長

陸軍中將 二子石官太郎

任第十二師團長

陸軍中將 本庄 繁

任第十師團長

陸軍中將 金山 久松

近衛師團長親補

近衛師團長津野一輔中將病歿の爲め左の通り親補された

第十師團長中將長谷川直敏

任第六師團長

陸軍中將 二子石官太郎

任第十二師團長

陸軍中將 本庄 繁

任第十師團長

陸軍中將 金山 久松

近衛師團長親補

近衛師團長津野一輔中將病歿の爲め左の通り親補された

第十師團長中將長谷川直敏

任第六師團長

陸軍中將 二子石官太郎

任第十二師團長

陸軍中將 本庄 繁

任第十師團長

陸軍中

雪

夜がたり

大佛次郎

(六)

二階も一番奥の、小綺麗な部屋であつたが、悪い事には二間置いて向うに客がゐて藝者も来てゐる、意味を聞き取れの程度に底い、酒に浮いたみだらな話聲がいよいよ二人を落着かなくさせた。

幾分期待してゐた幼馴染同志

さし、のしつとりした氣分には無論なれず合ともすればお互が氣拙く黙り込んで、その口が味のない猪口をふくむのだけた。

新助は、絶えずいらしくして

これはいけないと思つてゐながら、それが言葉の裏に苦しく響くので。口をきくたびによくのだつた。

「まつたく久し振だつた。お前さんが來てくれようとは思ひ掛けなかつた」

「いえ、すつと若旦那のことア忘れたことが御座いません」

「ほんたうに二十年目で御座いまますから」

「變つたねえ、お互に。だが、お前さんい」と立派になんたずつた

「さうちや御座いません…」

「…」

「若旦那、嘗ア私は急に今度思ひ立つて來ましたのも、何と云ふことなく昔が懐かしくなつたからで御座いますよ…子供の時分よく歩いたり遊んだりした場所を何故か急に見度くなりましたが…やつぱし、幾分齡の加減で御座いませうねえ」

「考へれあ變つたもの、つい前

ばかり前、橋だの、堀割だの、

こちへまわつたのが丁度七日

で歩きました。どこへ行つても

變つたといつても昔の姿が見付

違ひますねえ…」

「…」

なせ、誰にも會はずに土地だけを見て歸らうとしたか?それ

をきくのは二十年前に太郎吉が

何故逃げたか?古い問題にさ

はる事になる。詰がそこへ行け

ば、お村の名が出る…

これには出來ることなら觸れ

たくないかつたのだ。

だが、どんな話も、きまつて

てもよかつた。

やがて、新助は云つた。

「太郎さん、たいてい、もう知

つてゐなさるだらうが、私アと

なせか、その時、新助は、自

分の心が石のやうにかたくなつた

のを知つた。

「向にも申上ませぬ」

太郎吉は、かういつて、まる

で、びつくりした所で御座いま

した。私もまたお二人がお仕合

せにお暮しになつていらつしや

た額を疊に押つけた。

「お父さんは、今どちらにいら

つしやりますか……それを聞か

せてくださいまし。後生で御座い

ます……」

「それを聞いて、どうしようつ

て云ふんだ?太郎さん!!

と、思はずいつた。

新助が自分でうろたへたくら

わらしの豫感の前に

立つ

ふるへ

立つ

「太郎さん、お村は、お前さんらである。
の事を思つてゐたんだ!!」
新助は何んでもないことや
しなたにもお目にかかるまでも
ござりましてもほんとうにそ
うにすぱりといひ放つた。

太郎吉は、無言で目を上げた
お村を訪ねて一緒になる氣ぢや
あるまいね?」
お村を訪ねて一緒になる氣ぢや
ありますか…」

「若旦那、それアほんたうで御
歩きました。どこへ行つても
歩きました。どこへ行つても
お村を訪ねて一緒になる氣ぢや
ありますか…」

「そのほかに…私に、すること
が何がありませう…」

「…」

「まさか、お前さん、これから
お村を訪ねて一緒になる氣ぢや
ありますか…」

「太郎さん、お村は、お前さん
らである。

O Japão em S. Paulo

MASAO SUZUKI

Rua S. Bento, 68A
Caixa 344 Tel. 2 - 2788

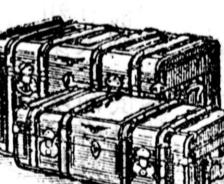
S. PAULO

舊藤崎商會聖市支店

鈴木正雄



F. Ambrosio & C°

Rua José Bonifacio, 39 Caixa 152
Tel. 2 - 1298 São Paulo皮革、なめし皮
履物、カバン、其
他旅行用具各種

日本品輸入商

鈴木正雄

左記の諸氏の現住所御承知の方は弊店に御
一報相煩度候

姓 名	縣 名	姓 名	縣 名
中 村 留 嵩	和 歌 山	外 村 愛 助	山 口
福 島 権 平	"	寺 田 與 一	"
平 楠 太 郎	"	竹 本 弘 二 郎	"
青 西 源 三 郎	"	川 本 千 代 吉	"
森 健 一	"	立 泽 六 右 衛 門	埼 玉
内 川 荘 長 野	"	若 杉 敏 男	熊 本
長 澤 伍 市	"	登 清 太 郎	鹿 尾 島
青 西 源 三 郎	"	佐 々 木 才 治	群 馬
森 健 一	"	成 田 喜 代 松	秋 田
内 川 荘 長 野	"	佐 佐 賀	"
長 澤 伍 市	"	立 泽 六 右 衞 門	埼 玉
青 西 源 三 郎	"	若 杉 敏 男	熊 本
森 健 一	"	登 清 太 郎	鹿 尾 島
内 川 荘 長 野	"	佐 々 木 才 治	群 馬
長 澤 伍 市	"	成 田 喜 代 松	秋 田
青 西 源 三 郎	"	佐 佐 賀	"
森 健 一	"	立 泽 六 右 衞 門	埼 玉
内 川 荘 長 野	"	若 杉 敏 男	熊 本
長 澤 伍 市	"	登 清 太 郎	鹿 尾 島
青 西 源 三 郎	"	佐 々 木 才 治	群 馬
森 健 一	"	成 田 喜 代 松	秋 田
内 川 荘 長 野	"	佐 佐 賀	"
長 澤 伍 市	"	立 泽 六 右 衞 門	埼 玉
青 西 源 三 郎	"	若 杉 敏 男	熊 本
森 健 一	"	登 清 太 郎	鹿 尾 島
内 川 荘 長 野	"	佐 々 木 才 治	群 馬
長 澤 伍 市	"	成 田 喜 代 松	秋 田
青 西 源 三 郎	"	佐 佐 賀	"
森 健 一	"	立 泽 六 右 衞 門	埼 玉
内 川 荘 長 野	"	若 杉 敏 男	熊 本
長 澤 伍 市	"	登 清 太 郎	鹿 尾 島
青 西 源 三 郎	"	佐 々 木 才 治	群 馬
森 健 一	"	成 田 喜 代 松	秋 田
内 川 荘 長 野	"	佐 佐 賀	"
長 澤 伍 市	"	立 泽 六 右 衞 門	埼 玉
青 西 源 三 郎	"	若 杉 敏 男	熊 本
森 健 一	"	登 清 太 郎	鹿 尾 島
内 川 荘 長 野	"	佐 々 木 才 治	群 馬
長 澤 伍 市	"	成 田 喜 代 松	秋 田
青 西 源 三 郎	"	佐 佐 賀	"
森 健 一	"	立 泽 六 右 衞 門	埼 玉
内 川 荘 長 野	"	若 杉 敏 男	熊 本
長 澤 伍 市	"	登 清 太 郎	鹿 尾 島
青 西 源 三 郎	"	佐 々 木 才 治	群 馬
森 健 一	"	成 田 喜 代 松	秋 田
内 川 荘 長 野	"	佐 佐 賀	"
長 澤 伍 市	"	立 泽 六 右 衞 門	埼 玉
青 西 源 三 郎	"	若 杉 敏 男	熊 本
森 健 一	"	登 清 太 郎	鹿 尾 島
内 川 荘 長 野	"	佐 々 木 才 治	群 馬
長 澤 伍 市	"	成 田 喜 代 松	秋 田
青 西 源 三 郎	"	佐 佐 賀	"
森 健 一	"	立 泽 六 右 衞 門	埼 玉
内 川 荘 長 野	"	若 杉 敏 男	熊 本
長 澤 伍 市	"	登 清 太 郎	鹿 尾 島
青 西 源 三 郎	"	佐 々 木 才 治	群 馬
森 健 一	"	成 田 喜 代 松	秋 田
内 川 荘 長 野	"	佐 佐 賀	"
長 澤 伍 市	"	立 泽 六 右 衞 門	埼 玉
青 西 源 三 郎	"	若 杉 敏 男	熊 本
森 健 一	"	登 清 太 郎	鹿 尾 島
内 川 荘 長 野	"	佐 々 木 才 治	群 馬
長 澤 伍 市	"	成 田 喜 代 松	秋 田
青 西 源 三 郎	"	佐 佐 賀	"
森 健 一	"	立 泽 六 右 衞 門	埼 玉
内 川 荘 長 野	"	若 杉 敏 男	熊 本
長 澤 伍 市	"	登 清 太 郎	鹿 尾 島
青 西 源 三 郎	"	佐 々 木 才 治	群 馬
森 健 一	"	成 田 喜 代 松	秋 田
内 川 荘 長 野	"	佐 佐 賀	"
長 澤 伍 市	"	立 泽 六 右 衞 門	埼 玉
青 西 源 三 郎	"	若 杉 敏 男	熊 本
森 健 一	"	登 清 太 郎	鹿 尾 島
内 川 荘 長 野	"	佐 々 木 才 治	群 馬
長 澤 伍 市	"	成 田 喜 代 松	秋 田
青 西 源 三 郎	"	佐 佐 賀	"
森 健 一	"	立 泽 六 右 衞 門	埼 玉
内 川 荘 長 野	"	若 杉 敏 男	熊 本
長 澤 伍 市	"	登 清 太 郎	鹿 尾 島
青 西 源 三 郎	"	佐 々 木 才 治	群 馬
森 健 一	"	成 田 喜 代 松	秋 田
内 川 荘 長 野	"	佐 佐 賀	"
長 澤 伍 市	"	立 泽 六 右 衞 門	埼 玉
青 西 源 三 郎	"	若 杉 敏 男	熊 本
森 健 一	"	登 清 太 郎	鹿 尾 島
内 川 荘 長 野	"	佐 々 木 才 治	群 馬